

International Development Center of Japan
国際開発センター

「差別」をどう克服するか ～ネパールで考える～

ネパールは社会的差別が幾重にも絡まっている国である。その第一が民族・宗教差別。ネパールは小国ながら実に多くの民族から成り（123の言語が使われていると言う）、それぞれの間に根強い差別がある。民族はインド・アーリア人系とモンゴロイド系に大別される。古くインド大陸から迫害や戦火を避けて、あるいは耕地を求めて丘陵地帯に移住してきたインド・アーリア人系（ヒンズー教徒）が歴史的にネパールを支配し、モンゴロイド系（多く仏教徒）と、別系統のインド・アーリア人系（インドと地続きの平野地帯、かつての猖獗くしょうけつ>の地の先住民で多くはヒンズー教徒、一部がイスラム教徒）を差別・抑圧してきた。この差別への抵抗が現代ネパール政治の底流にある。

第二がカースト差別である。旧カースト制度によれば、人は4つの階層に分かれ、第一階層は神官の「ブラーマン」、一番低い第四階層が不可触賤民で「ダリット」と呼ばれる。ダリットは人口の15%程度と推計され、最も貧しい層を成す。旧カースト制度とそれによる差別行為は現行憲法で明確に否定されているが、実際は社会慣習として陰に陽に差別が続いている。

第三の差別が性差別である。基本的にネパールの社会は民族やカーストを問わず極めて男性優位である。かつての日本がそうだったように、女性は娘の間は父親に従い、嫁しては夫と舅（しゅうと）に従うものとされる。女性は文字通り家庭に縛られていて外の社会に出ることは滅多にない。最近は変わりつつあるとはいえ、地方の村に行けば事情は昔のままである。

このような差別を克服するにはどうしたらいいのだろうか。よく見られるのは差別されてきた人々を優先的に扱うアフターマティイ・アクションである。インドやマレーシアで長く採られてきた政策であり、ネパールでも近年、地方予算の35%を女性やダリットなど特定のグループに振り向けることが義務付けられた。しかし、この政策は差別の対症療法に過ぎず、差別意識を根底から払拭することはできない。それを何年続けても差別意識は消えず、むしろ逆にひそかに増長してしまうのではないかと私は考える。

差別意識を真に克服するのは難しい。しかし、道は一つあると思う。それは、異なるグループが協働して一つのことを成し遂げることである。男と女、ダリットとブラーマン、ヒンズー教徒と仏教徒とイスラム教徒——。差別し、差別されているグループ同



飲用水タンクを完成させた住民グループ（ジャンジャ郡ジャガトラデビ村）

士が同じ一つのことに共同で取り組み成し遂げること。これのみが人間の持つ差別意識を根底からなくすことのできる道である。無論時間はかかる。しかし、それしか方法はないと思う。

このことを私が確信するに至ったのはネパールで国際協力機構（JICA）の実施する「ジェンダー主流化及び社会的包摂促進プロジェクト」に携わってからである。そこでは村の小プロジェクト（飲用水タンク建設、道路補修、所得向上のためのヤギ飼育、女性向けの研修など）の形成から選定、実施、モニタリングと監査までの一連の過程を民主化することを目指した。村行政で高カースト男性支配からの脱却と住民間の平等の実現を図ったのである。

その中で、女性やダリットが生まれて初めて住民グループの長となり、プロジェクトを成功させる例が続々と現れた。以前にはあり得なかったことである。ある村ではダリットの主婦がリーダーとなり道路を横切る排水路工事が完成した。ダリット女性が土木工事を領導するなど、前代未聞のことであった。別の村では女性グループがクリニック建設に着手したが、女性を軽く見、予算を私せんとする男性達の執拗な妨害に遭う。それをはねつけているうちに心ある男たちが味方に付き、辛苦の末、めでたく竣工に至った。

このような事実を目の当たりにして、女性やダリットに対する人々の見方が変わったのである。差別を克服する道を私が覚った瞬間であった。

（文責：国際開発センター 主席研究員 豊間根 則道）